

2023 年度第 2 回研究会（通算第 13 回目）

- 日時：2023 年 7 月 30 日（日）13:00–17:30
- 場所：オンライン会議室
- 共催：基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」, 東北大学大学院情報科学研究科「言語変化・変異研究ユニット」

音韻論および統語論を中心として、4 名のメンバーが口頭発表し、意見交換を行なった。取り上げる言語とテーマは、アラビア語からコプト語への借用、日本語と英語の音韻変化の比較、中国語の声調に関する方言感変異、シンハラ語の wh 移動と多岐に渡った。

1. 宮川 創 (AA 研共同研究員, 国立国語研究所) & モナ・サウイ (アシュート大学)  
「エジプト語史における借用語音韻論と母音組織の再建」

(Loanword Phonology and Vowel Reconstruction in the History of the Egyptian Language)

43 の医学文献からなるコプト語コーパスにおいてアラビア語およびギリシア語からの借用語のコプト文字による綴りを調べ、コプト語音韻論の問題である母音字  $h$  vs.  $\epsilon$  と  $\omega$  vs.  $o$  の対立、そして母音字重複の分析を行った。古ヌビア語、古代エジプト語歴史言語学、そしてコプト語の内部の構造主義的言語学的研究からは、 $h$  vs.  $\epsilon$  と  $\omega$  vs.  $o$  の対立は長さの違いではなく、開口度の違いであること、そして母音字重複は長母音を表している可能性が高いことがわかっている。今回の医学文献の新しい分析からは、 $h$  vs.  $\epsilon$  と  $\omega$  vs.  $o$  の対立は長さではなく、開口度であることを示す証拠を示した。母音字重複が長母音であることを示す証拠は、今回の医学文献コーパスでは、十分とは言えないものの、少数の証拠を示すことができた。

2. 南部智史 (AA 研共同研究員, モナシュ大学)

「バリエーション理論と日本語：コーパスを用いた「い」抜き言葉の調査」

(Variation theory and Japanese: A corpus-based study on the variants 'teiru' and 'teru')

この発表では、「い」抜き言葉と呼ばれる「ている」「てる」のバリエーションについてコーパス調査を行い、「ている」「てる」の選択に影響を与える社会的要因として、フォーマリティの影響（「ている」はフォーマルな場面で使われ、「てる」はカジュアルな形）以外の要因も考えなければならない、という議論を行った。

コーパス分析の結果、フォーマリティの効果に加えて、「てる」使用率には書き言葉と話し言葉に大きな差があること、話し言葉でも、独話より対話の方が「てる」がより多く使用されていることが確認された。また、カジュアルな場面で使用される「ている」は、フォーマリティの視点から説明できないため、「ている」を含む文は状況描写であることを明示するためのストラテジーまたは「ている」はそのマーカーとして使用されている可能性について

述べた。

最後に、「てる」には、形式として「い」が落ちたわけではない語彙としての「てる」(morphological variation) と、「ている」の「い」が落ちた場合の「てる」(phonological variation) の2種類がある可能性を指摘した。

### 3. 高橋康徳 (AA 研共同研究員, 神戸大学)

「中国語における声調とは何か? -従来知見と今後の展望-

(The new definition of Chinese tones)

中国語の音韻研究における声調の定義について最新の動向を紹介した。従来の研究では「語の弁別に関わるピッチの高低」を声調の定義としていたが、入声の問題や発声 (phonation) に関する新発見によって上記定義の改訂が求められていた。本発表で注目したのは朱曉農 (Zhu, Xianong) が提案する「喉頭における調音活動の複合体」という新たな声調の定義であり、音節の中での声調の位置づけを整理しながらこの定義の利点について解説した。

### 4. 岸本秀樹 (AA 研共同研究員, 神戸大学)

「シンハラ語の疑問文の焦点化と移動の制約」

(Focusing and movement constraints in Sinhala questions)

本発表では、シンハラ語の WH 疑問文と Yes-No 疑問文に現れる Q 要素が焦点を示す機能と疑問の演算子としての機能があるため、文中の焦点位置から文末の作用域を示す位置まで移動することを示した。WH 疑問文では、Q 要素が文末位置に現れた場合には、統語の移動が起こるが、文中の焦点の位置に現れると、LF で文末に移動することを論じた。また、Yes-No 疑問文では、Q 要素が統語で移動するが、発音に関しては、文中の焦点位置であっても文末位置であってもよいことを論じた。